

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2008年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			文学	研究科	英米文学	専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名			氏名			
	文学部文学科英米文学専修 教授			菊池清明 印			
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>			<b>個人・共同の別</b>	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名		
<b>研究課題名</b>	中英語頭韻詩における表現技法とその比較研究						
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年			氏名			
	文学研究科英米文学専攻 博士課程後期課程2年			松崎武志 印			
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年			氏名			
<b>研究期間</b>	2008			年度			
<b>研究経費</b>	200			千円			

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

14世紀後半ごろから多くみられてきた中英語で書かれた頭韻詩における修辞技法に焦点をあて、個々の作品における冗語表現や歴史的現在などといったさまざまな技法について調査し、それらを比較することによって、中英語頭韻詩における表現技法の特徴を明らかにするものである。本研究は詩における表現技法の分析・調査といった学問分野をカバーしていると考えられる。特に、『ガウエイン卿と緑の騎士』を中心とした Cotton Nero A.x.写本における表現技法を考察することによって、それぞれの作品における表現の効果や、詩人の意図などを探り、14世紀の頭韻詩の特徴を明らかにする。

**キーワード** (研究

内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[定型表現と詩人の意図] [音的效果の高さ] [反復表現]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

## 1. 研究の目的

本研究では特に『ガウェイン卿と緑の騎士』における表現技法の考察を中心として、その効果及び、詩人が技法を用いた意図を明らかにしていった。反復語句である Repetitive Word Pair (以下では RWP とする) という一見すると不必要で、意味のないような表現がどのような意図をもって使用されているのかということ主に扱った。

本研究で扱った RWP は表現の繰り返しや文の繰り返しなどを含まずに、等位接続詞によって結ばれている単語の組み合わせに限定して、『ガウェイン卿と緑の騎士』の中に現れるものをすべて抜き出し、それを構成している単語の語源や文脈における意味を検証していった。

## 2. 定型的表現

まず、2530 行の中で、等位接続詞 and, or などによって結ばれている表現は 175 例確認された。それらの表現の出現場所は、Alliterative long line に限らず『ガウェイン卿と緑の騎士』に特徴的な詩形である bob and wheel においても同様に確認された。はじめに考察したものは、定型句としての RWP である。『ガウェイン卿と緑の騎士』は古英語以来の伝統的な頭韻詩という詩形で書かれている。そのために、韻律の要請を満たすために and などによって結ばれた表現を使用したのではないかという予想が立てられる。実際の結果を見てみると、4 回使用されている表現が 1 例、2 回使用されている表現が 2 例とあり、これらの使用場面や韻律を検証した結果は、意味や内容に関係なく、韻律の要請で RWP を使用したということが明らかになった。

また、1 つの語が同じで他方が異なる表現の組み合わせは、2 例あったが、この表現は異なる単語の意味を注意深く検証すると、意味がその表現している内容に適したように変えられているということがわかる。つまり、先ほどの定型句の表現のように意味はほとんど無視され、同じ韻律や表現をするためだけに使用されている RWP とは異なり、『ガウェイン』詩人が定型句の表現を用いつつも、文脈に適した語句を用いていることが理解できた。

## 3. 語源からの検証

次に RWP を構成する語の語源についての検証を行った。RWP の語源に関しては Otto Jespersen が二つの語源の違う語を組み合わせることによって、一方の語が他方の語の解釈の手助けとなるように構成されているという Interpretation Theory という理論を述べている。実際の作品における語源を調査することによって、『ガウェイン卿と緑の騎士』における RWP はどのような目的をもって使用されているのかが明らかになった。

最も多く使用されている語は、古英語起源の語であり、175 例中 70 例の RWP が古英語起源の語で構成されている。また、本来語である古英語起源の語と、フランス語や古ノルド語起源の語とで構成されている RWP はそれぞれ 49 例、25 例ずつ確認された。これらの語は、古英語起源の語が先に現れたり、等位接続詞の後に現れたり、現れる場所は決定されてはいない。古英語が先に現れる場面においては、次に続く語に対して、本来語である古英語起源の語を先に示すことで、次の外来語に対する解釈の手助けをするという Interpretation Theory の考え方が当てはまる。しかし、逆に外来語が先に現れて、その後に古英語由来の語が現れる組み合わせは、その多くが頭韻という音的要素で結ばれているということから、その結びつきは非常に強く、聴衆にとってこれらの RWP は 1 つの表現としてとらえられたと考えられる。つまり、この表現によって聴衆は本来語と外来語の組み合わせで、本来語ではない語の意味を理解することができていたと考えられる。

## 4. 音的効果の検証

『ガウェイン卿と緑の騎士』における RWP はその多くが頭韻を用いて構成されている。他の中英語の詩である *The Owl and the Nightingale* などの作品と比較すると『ガウェイン』は 175 例中 147 例、84% という高い割合で頭韻で結ばれているのに対し、*The Owl and the Nightingale* は 22% という低い割合でしか使用されていない。また、古英語や中英語の散文などの使用割合よりもはるかに多くの頭韻が使用されていることが明らかになった。また、RWP を動的な場面や登場人物の感情の起伏のある場面において使用することで、頭韻などの繰り返しの音の使用によって、聴衆の注意をひきつけたり、動的なその動きを音的効果を用いて表現したりしている例も見られた。

## 研究成果の概要 つづき

### 5. 結論

『ガウェイン卿と緑の騎士』における RWP を定型的表現・語源・音調効果といった点から考察した。その結果は、『ガウェイン』詩人はこの RWP という表現技法をさまざまな目的を持って使用しているということが言える。定型的な表現においても場面に適した語句を選択して使用したり、語源を意識した RWP の構成にすることによって聴衆の手助けや意味の解釈の役割を担わせていたりしていることが明らかとなった。

また、とりわけ多くの語が頭韻で結ばれていることが理解できたが、このことは、これまでの研究によって口承定型詩の伝統的な表現や場面がみられるばかりか、そのような理論が適用できるほど、口承文学の伝統にのっとった作品であるということが指摘されているが、この研究によって明らかになった、RWP の音的效果の高さは本作品のそうした口承性を示す重要な表現であるということがいえる。